

## F. Scott Fitzgerald と "The Rich Boy"

(1920年代の S. Fitzgerald と "The Rich Boy" の技法)

元 柳 富 美

### I

1956年春たけなわの頃 Hollywood に遊んだ。美しい海岸線に沿ってサンタ・モニカを過ぎ、西へ車を走らせると、Malibと言う風光絶佳の地へ辿りつく、この海の荘観と山合に沈む夕陽の美しさに魅せられて、私はしばらくこの地にとどまつたのだが、こゝがはからずも1920年代の代表的作家、F. Scott Fitzgerald が晩年を過した地である事を知り、私のこの作家への興味は倍加した。オ一次大戦後思想は混乱し、幻滅の荒野にたつて絶望と戦い、自己の内部に大きく口を開けている虚無感と対決し、それを唯一のたよりにしつつ、新しい自己の realism を築く手がかりとして、苦闘したアメリカの作家グループがあつた。彼等を Lost generation の作家と呼んだけれど、S. Fitzgerald はその旗手であつた。

戦争とそれに加うるに敗戦と言ふ新しい深傷を負う私達に彼等の作品が興味以上の共感を呼び覚ますに置かぬのは、あながち私達だけの場合ではないだろうし、大戦をくぐつて来た世代人共通の宿命が流れているのを感じるのである。Lost とはその姿態を呼んだ名前であろう、その姿態に過ぎなかつた事は注目に価する。混乱に渦巻く戦場に投げ出されたけれど、生きるためには新しいモラルを求めなければならなかつた筈である。

Lostした事で却つて次元の自我を創造する事が出来強力な活動に Lost Generation の作家群の文学的価値と特徴があつたと認められる。それならば S. Fitzgerald はどの様な自我を求め、どの様なモラルの中に生きてのであろうか、探究の道しるべは自ら作家の血と生活が規定すると思う。宿命も又業苦とするなら、人間の出發と成長は業苦に対する反逆が妥協である。こゝでしばらく彼の出發を探つて見よう。

### II

Francis Scott Fitzgerald は 1896年 ミネソタ洲の St. Paul に生れた。父方の祖先には国会議員もいたら

(1) Malib, Hollywood より20分位の drive で行ける地点にある美しい避暑地

しく、父は南都出身の優雅な紳士であつた。母はアイルランド系で気性強く、その特徴を彼が受けつた事は否めぬけれど、二つの反する血の交つた Fitzgerald の体内には、その様な血の相剋が生れながらに備わつていた事がわかる。彼は富と名声に憧れ、野望に燃え、白昼夢の崩壊を恐れながらも夢見ないわけにゆかぬ、無邪気さで東部へやつて来た。青草の靡く健康な中西部から俗悪な東部へ来た事に問題があると、E. Wilson は言う。けれど、寧ろ彼がアイルランド系の血統を引いていた事の方に意味が強く、romantist であるが、皮肉で、抒情を愛しながらも、自己に厳しい、数々の矛盾した感覚を一身に集めて捕えがたい性格を作つていた。然しその中に見落してならぬ事は、彼がカトリック信者であり、少年時代からのカトリシズムが絡始彼のモラルの根底にあつて、影響を与え、己を批判させた。生涯狂える妻と別れ得なかつたし、旅路の終りにあの派手な「エスカイア」誌上で真向うから「自己批判」をやつた事も悲壯だけのものではない。

長じてプリンストン大に入学し、在学中から作家活動を始め、「古今を通じて最大の作家になる」願望のため、ひたむきに文学修業をこの時期に始めて居る。J. Keats の詩の幻想はとりわけこの夢見る魂を揺つたらしく、"Ode to the Grecian Urn" "Ode to a Nightingale" の抒情に涙を流し、詩が文学の出發に當つて大きな役割を示しているのは Hemingway の場合と同じく注目されるべきで、彼の文学を規定し、抒情性を底流させたと言う意味で、この Keats への傾頭は考えてよい事である。後年の傑作 "Great Gatsby" の均整のとれた構成、流れる様な文章の甘美な味いは Keats 流の抒情の流露とも見える。これより一年後に出た "The Rich Boy" の流暢な style についても同じ事が云える。

1917年アメリカは大戦に参戦した。この参戦は20世紀の現実を突如として転換し、とりわけ、アメリカ文学の様相を豊かに改善して行つた。折がらプリンストンの学生であつた彼も軍隊に這入つて行く、これは愛国心からと言うよりも寧ろ騒然とした社会環境の中にあつて、じつとしていられぬ血気にはやる青年の行動であつたと解すべきであり、戦争も又冒険であり、青春の夢であつ

た。Hemingway、Dos Passos も身に余る勇気と冒険の心を抱いて従軍したのではなかつたか？皮肉な事に彼の軍隊生活は本国のキャンプに終り、一度も前線へ行く経験を持たなかつたが、彼もこれを一生の遺憾としている。戦争文学をものする事なかつた彼がそのテーマを自己の richly confused character と波乱の時代を通して、富める特権階級や、時代の先端生活に鉢をむけて行くが、空しく過ぎゆく青春や flapper の狂騒の中でも、その人間の生態に肉迫しようと試みた忠実な心は、血みどろになつて、人間生存の真実を探り当て様ともがいた。言い代えれば、彼は唯一の基準とも考えられるものを実現しようと体当たりして行つたのだがそれは同時代の作家達には思いもよらぬ程、困難で手に入れ難いものであつたし、彼にも、意識するが、実現不能であつた、ため“失敗”を描いてあれ程執拗に追求したのであろう、又敢えて“失敗”を己が主題として選んだのであろう。

最初の長編 “This Side of Paradise” (1920年) が発表された。24才の年であつた。裕福な家庭に生れ、母親に甘やかされて育つた、Amory Blaine を主人公にして、戦後の解放された青年の姿を大胆に描き、この自伝的作品によつて一躍文名を知られ、若き世代の代弁者と迄呼ばれる様になつた。それから享楽と浪費の生活が始り、飲酒癖は昂じて、デカダンの淵にあえがねばならぬ結果を生むのである。けれど “The Beautiful and Damned” (1922b年) についで発表された傑作、“The Great Gatsby” に至つて彼の全才能がつきこまれて、一時に輝きをました様な筆の冴えを見せる作品が出現する。後しばらくは筆を置いたわけではなかつたが、問題作が書けず、二、三の優れた短篇を残して、浪費と華麗は一瞬の悪夢の様に消え去り、1920年の終焉は迫つて、全米はあげて、あの三十年代の大不況の中におち入つて行く、豪華な生活は去つて、二度三度とヨーロッパに逃避したけれど、借金苦に悩み、同時に病災にもつきまといられる。次に “Tender is the Night” (1934年) とオニの優秀作を世に問うたけれど、生活は破綻し、妻は発狂し、遂にシナリオ・ライターの職を求めて Hollywood へ移らねばならなかつた。

## II

こゝに取り上げる “The Rich Boy” (1926年) は最初 Red Book 誌に掲せられ、後、“短篇集” All the Sad young man” に収められて出版された。青春の夢をいつばいにたぐえ、回想の抒情をながす秀作が多いとされているものである。一、二をのぞけば、殆んどの作品が作者自身の投影であつて、経験が何らかの形で忠実

(1) The crack -up, p 3.

に描かれている事は Fitzgerald の場合にも言われる事である。“作者”と“主人公”は融合して、一つになつていく傾向が是迄認められた。両者は感情的にも道徳的にも、同じ空気を吸つて、同じ様に描かれたのであつた。そこには両者を区別する何ものをも存在しなかつたからである。けれども、Fitzgerald が整つた構成と優れた手法を用いる事によつて “The Great Gatsby” の中にはこの両者の分離に見事に成功をしたのである。T. S. Eliot が「客観的相關物」と名づけたものに到達したと絶賛した所以のものである。

“The Rich Boy” にもその技法を用いて、特徴の一つは I と言う一人称の比較的貧しい階級の語り手を設定して、事件の推移や主人公の心理作用を客観的に描こうとした意図である。この技法は彼以前に既に Conrad や James によつて完成の域に達していたもので、物語の中心に、同情的で賢明な観察者を置く事に依つて、作品に簡潔さ、緊迫感、密度を与えようとする。

それでこの “The Rich Boy” のテーマが作者の念頭に浮んだ時に彼自身とは異つた type, つまり成功を収めた Very rich の一人が、富と言うものゝためにどんな type の人間になつて行くか、富がどの様な型の人間を作り出すかを書いて見るつもりであつた。

“Only way I can describe Young Anson Hunter is to approach him as if he were a foreigner and cling stubbornly to my point of view, If I accept his for a moment I am lost,”

と彼は提言している。

「金持と言うのは我々とは違うのだ……」

They are different from you and me, They possess and enjoy early, and it does something to them, makes them soft where we are hard, and cynical where we are trustful…….

以下に始るオ1章は作者の Prologue に始まり、大へん物議を醸した個所であるけれど、Hemingway が “The Snow of Kilimanjaro” の中に引用して諷刺をしている。こゝで作者はこの作品のテーマを詳しく述べ、純正客観に立とうとした用意と思われ、彼は決して金持を讚美しているわけではない。20年代の象徴である、金持階級を追求して、自分は客観的な局外者としての立場を堅持しようと言うのである。同時に一つ一つの事件を追つて、前述の motif を Anson の生活に近づけて具象的に展開させ、彼の行動のみにペンを集中させて 極めて realistic に筆を進めて行く。

先づ主人公の生い立ちから始め智性の芽生えを七才と

(1) The Rich Boy, Chapter I

(1) The Rich Bny, Chapter I

するなら、彼がいつ特権意識を始めて経験したかを語っている。

Anson's first sense of his superiority came to him when realized the half-grudging American deference that was paid to him in the Connecticut Village. The parents of the boys he played with always inquired after his father and mother and were vaguely excited when their own children were asked to the Hunter's house.<sup>(1)</sup>

Yale 大学に入学してからも主人公は Yale 精神を軽蔑するかの様に見えて仲々に普通の学生生活にとけこまない。又若い彼の憧憬を説明してそれは月並なもので十分あつたけれど、普通人のそれと違って、理想のヴェール等に覆われたものでなかつた。直も作者は、

Most of our lives end as a compromise—it was as a compromise that his life begin.<sup>(2)</sup> と続けているけれど、“遠慮のない妥協”で始つた彼の人生は果して何で終るのであるか？

Marcus Cunliffe はこう述べている。—

He is tempted by wealth, and he struggles to maintain a detachment rendered difficult by the fact that he has nothing positive to offer in place of the chilly aplomb the very rich<sup>(1)</sup>.

彼は遂に“positive”のものを示して態度をはつきりさせなかつた。何故か、富とか名声とかに対する、人間の眞の価値はどう言う関係にあるのであろうか、それをはつきりさせなかつた。喜悅、美、優雅は青春の名残であり、年齢と共にあせて行く必然のものである。やはり富の敗北の姿を描くにとどめたためだろうか？

#### IV

Anson が初恋の相手として、保守的で誠実そのもの様な Paula と恋愛におちる。彼も眞の愛情を覚えてそのため女の性格は深められ豊かに花開く、もし彼女の暖い安らかな人生に這入り得たら自分はどんなに幸福だろう、と呟く。けれどこの関係はどうしても婚約に踏切れない。何故なのか、と言う疑問が読者の頭に湧いて来る。その破綻を除々に具体的に展開して主人公が特権階級に属するための特殊な性格を表現して問題点に迫つて行く、そこが prologue で述べた stubbornly cling to my point of viewなのであろう。世の常の恋愛の筋書通りに行かず、Anson は酒を飲み過ぎて酔いつぶれ、醜体を愛人と母の前にさらけ出して終う、そしてその後

(1) The Rich Boy, Chapter II

(2) The Rich Boy, Chapter II

(1) Marcus Cunliffe, The Literature of the United States P 277.

始末になつて—

On his part he apologized with sincerity and dignity—that was all; with every card in her hand Mrs. Legindre was unable to establish any advantage over him. He made no promises, showed no humility, only delivered a few serious comments on life which brought him off with rather a moral superiority at the end.<sup>(1)</sup>

これ程のひるまない superiority→Prideを示す、何と出世主義の誇り高き事か、逆に冷い諷刺のあとがしのび寄ろうとして面白い表現である。

愈 Anson の type の造型に進んで作者は—

He dominated and attracted her, and at the same time filled her with anxiety, Confused by his mixture of solidity and self-indulgence, of sentiment and cynicism—incongruities which her gentle mind was unable—Paula grew to think of him as two alternating personalities.<sup>(1)</sup>

彼女を魅惑しているものと、懸念させるもの、堅固なものと放縦なもの、情的であるかと思うと、皮肉であると言う二重性格 (alternating personality) が表明される。これが彼女に懸念を抱かせる原因となる。この性格こそ作者に近い type の人物である。

J. B Priestley も次の様な見解を述べている。

Certainly Fitzgerald was anything but an integrated personality. His was a richly confused character in which, as I shall try to show, at least two sharply contrasting and opposed strains can be discovered.<sup>(2)</sup>

それが作家としての態度となる時には、科学者の持つ冷い観察眼を以つて完全にその事にも没入出来る天真爛漫さを持ち合せた二重の心理作用の持ち主であつた事を伝記者の A. Misener はいみじくも述べている。

One of the most remarkable things about S. Fitzgerald as a writer is the dual character of his self-knowledge, the curious way in which he combined the innocence of complete involvement with an almost scientific coolness of observation,<sup>(1)</sup>

(1) The Rich Boy, Chapter III

(1) The Rich Boy Chapter IV

(2) The Bodley Head, Scott Fitzgerald with an introduction by J. B Priestley, P 8

① Afternoon of An Author, F. Scott Fitzgerald with An Introduction by Arthur Misener, P 9.

その様な眼こそ Professional (玄人) の眼であり、自己にも、他人にも、社会にすら、その虚偽を容赦せぬ眼であつた。これが語り手の側を代表する一つの原型である。もう一つの他の原型 Anson が富の鎧を着て、egoism をふり廻す時に、Paula は蒼白になつて、彼を懸念し、彼から離れ去る。と言う Plot を用いなければ作者の「遊閑階級に対する永続的な不信と憎悪を常にかきだしていた」<sup>(2)</sup> と言う彼のモラルに、即ち「金持は崩壊すべき運命にある」と説く諷刺が vividly に生きて来ないわけである。何故なら Paula とは sincerity で代表する幸福であり、正常な家庭生活を意味するものであるからである。溺酒も醜体も金持意識の具象であり、破局へ導く道具立であつたと考えられ、こゝに結末を到達させて Plot は十分に生き、金持の空しいと言う諷刺が効果を収めていると考えられる。何故私がこう反駁したかと言えば「Anson 程の才子が巨万の富を持つていて失恋するとはおかしい」と言う、世の常識的な考え方に答えるつもりであつた。「巨万の富の城に、鎧を着て Anson は立てこもり、裸になつて Paula の手を取るために下りて来なかつた」。のである。

## V

オ二の Flapper 娘との恋愛は人間の虚偽、愛情のからくり、己の欺瞞を衝いた一つの人間心理の狂言として眺める時に、味のある挿話となろう。この様な affair と平行に彼は New York の上流社会にずんずん頭角を現わして、世間的には成功の一途を辿つて出世をして行く、生活は恰も機械の様に仕事をよどみなく、はかどらせ、後輩家族の面倒もよく見て世俗的な面も描く、けれど、次々に年を取つて孤独に過ぎねばならぬ運命となる。そして遂には次の様な言葉を吐く身の上となる。

"I'll never marry, and I know a happy marriage is very rare thing. Besides I'm too old"<sup>(1)</sup> と。

オ三の事件では叔母の姦通事件に口を出して断固結着をつける。その一刀両断ぶりの態度が表面にはにじみ出ていない、けれど社会的な罪悪感を深く感じた、作者が Anson に Vicarious な態度を屢々取らせる。主人公が日曜日の朝教会の祭壇に立つて牧師代りを勤めた事と思ひ合はせて、一 Catholicism の片鱗が時折顔をのぞかせる気がするのである。巧妙なそして月並な会話のみで、この事件を押し切つて tension を進め、catastrophe に導いて、結末を二、三行つけ加えた描写は、却つて生き生きとして、感銘も深く、罪悪への意義も強く印象づけられる。以上の様に三つの事件を追つて豊かな内容

をもち、当時の金持階級や風俗習慣を描き、人間模様を巧みに織り出してくれる、けれど、この "The Rich Boy" もやはり富める青年の失敗の物語りである。Misener がこの書を評して「Anson の妙な金持の意識が、彼が最も熱心に求めていた家庭と正常な生活を奪い去り、人間生活の煩雑さの中に身を沈める事を厭うたので、自分の欲する人生を持ち得なかつた人間の悲劇<sup>(1)</sup>」と語っているが、一つの参考になる。

(2) The crack-up P. 77

① The Rich Boy IV

① Arthur Misener, The Far Side of Paradise, P. 132